みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Whales in Greenlandic Society : Capture and Utilization



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-07-12<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 本多, 俊和<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00009432 |

岸上伸啓編『世界の捕鯨文化──現状・歴史・地域性』
国立民族学博物館調査報告　149:105-125(2019)

# グリーンランド社会の中のクジラ
## ──捕る，食べる，そして活用する

本多　俊和（スチュアート ヘンリ）
（元放送大学）

## 1　はじめに

およそ5000年前から陸・空・海の資源を利用してきたイヌイト社会では，その中でもとりわけ鯨類は経済基盤を支えるとともに，文化的にも特別視されてきた。グリーンランド・イヌイトもその例外ではなく，4000年以上前から鯨産物を活用している。

本稿ではグリーンランドにおける「クジラ」を歴史的な視点をまじえてその経済的，社会的，文化的な位置づけについて考察する。16〜19世紀のヨーロッパ捕鯨船がグリーンランド・イヌイト社会に大きな変化をもたらした影響を指摘した上で1950年代以降の捕鯨活動がどのような変化を経て来たかを考察して，現代行なわれている協働捕鯨（collective hunting）と漁船による捕鯨（漁業兼捕鯨：whaling by fishing vessels），分配の仕方，鯨産物の流通は地域によって異なっているのかについて論究する。

国際捕鯨委員会（IWC）の捕獲枠（quota）という国際的な枠組みに加えて，グリーンランド政府は地域別の経済状況や捕鯨方法を基準に国内の鯨種別の捕獲数の割り当てを決めている。しかし，その割り当てをめぐって小型ボートと漁業船の船主の間に，さらに狩猟許可証の違いによって捕鯨者同士の確執が顕在化していることの背景を探る。

鯨肉の消費については，スーパーマーケットの入荷量と販売実績を分析した結果，鯨肉が余っている可能性を指摘する。鯨肉は実際余っているのかを究明するために，スーパーマーケット以外の流通ルートおよびシェアリングなどを加味して，鯨肉の需要と供給に関する調査の必要性を明らかにする。

本題へ進む前にこの論文で使ういくつかの用語について，若干の解説を加える。
北アメリカ極北地帯とは，アラスカ，カナダおよびグリーンランドの高緯度ツンドラ地帯を指す名称である。東部極北圏はおよそ西経120度より東のツンドラ地帯という意味で使う。

イヌイトとは，およそ1000年前にベーリング海峡域で発祥したネオ・エスキモーのチューレ（Thule）文化（Newton 2005）の担い手に遺伝的，文化的な起源をもつチュコトカ半島および北西アラスカからグリーンランドの極北地帯にかけて分布する現在の先住民という意味で使う（本多 2017）。したがって，南西アラスカからセント・ローレンス島およびチュコトカ半島にかけて分布して，イヌイトとは通じない言葉を話し，文化も

異なるユイト（Yuit）などと名乗る民族を含まないことに留意されたい。イヌイトとユイトの両民族を一括して指す用語として「イヌイト・ユイト」を用いることとする。

グリーンランドの先住民は公式にはカラーシュリト（Kalaallit：カラーリトなどとも）と呼ばれる（スチュアート 2016: 33）が，グリーンランドは歴史的に氷床によって３つの地域に分断されていたので，現在でも独特の地域性が強く（Larsen 1997: 104; Nuttall 2005: 790–791; Sowa 2013: 187），遺伝的な構成にも差異が認められる（Helgason et al. 2006: 132）。北部の住民はイヌフイト（Inuhuit），あるいはアバネグスアグミウト（Avanersuarmiut）と自称し，東部のアンマッサリク地域ではトウヌミート（Tunumiit）と自称している。カラーシュリトと呼ばれてきた西部グリーンランドのイヌイトがグリーンランド人口の大半を占めていることと，西部は現代の政治・経済の中心であるため，カラーシュリトがグリーンランド全体の「国民名称」になっている。すなわちカラーシュリトは，現在は民族名称というより，「国民」という意味合いが強いので，本稿では以上の３つのグループをまとめて便宜的にグリーンランド・イヌイトと呼ぶ。

## 2　イヌイト社会へのヨーロッパ諸国商業捕鯨活動の影響（16～19世紀）

先史時代のチューレ文化が歴史期のイヌイト文化へ変貌する14世紀は「小氷期」（Matthews and Briffa 2005）の気候寒冷化の影響と，ヨーロッパからの捕鯨船との交易で鉄製品などを入手するために，それまでの大きな集落の社会集団が変質して機動性のある小集団に分散するなど，民族誌に記録されているイヌイト社会が形成されていく。この時期，すなわち16世紀はグリーンランド周辺の近海でヨーロッパの捕鯨船が操業しており，その後デンマーク（当時はデンマーク・ノルウェー連合王国）による植民地支配がはじまった17世紀から20世紀にかけての期間を便宜上，「近代」と呼び，20世紀以降は「現代」とする。

近代イヌイトの捕鯨はチューレ文化期のそれを引き継いだ形で行なわれていた（というよりもむしろ，記録のないチューレ文化の捕鯨活動は近代イヌイトの捕鯨活動を参考に想定されている）。地域によって違いはあるが，グリーンランド近海を回遊する鯨種はホッキョククジラ，ミンククジラ，ナガスクジラ，シロナガスクジラ，ザトウクジラ，マッコウクジラ，イワシクジラ，ゴンドウクジラ，シャチ，シロイルカ，イッカクと２種類のネズミイルカ（Phocoena phocoena など）である（Caulfield 1997a: 78）。

16世紀にはじまったヨーロッパ諸国による北大西洋での捕鯨活動は，17世紀初頭にはイギリスとオランダがデービス海峡にまで進出して捕鯨活動を開始した。18世紀にドイツが西グリーンランド沿岸で捕鯨をはじめ，1750年代になるとデンマーク（当時はデンマーク・ノルウェー連合王国）の捕鯨船が北西グリーンランドのマニーツォック（Mani-

itsoq）やウペルナビク（Upernavik）まで北上してディスコ湾の漁場開発に先手を打った。捕獲したクジラの脂身を陸上の施設（station）へ運んで精製した鯨油を樽に詰めてヨーロッパへ運んだ。

地名の所在地については図１を参照されたい。

19世紀中葉，乱獲のためにクジラの数が激減して，北西グリーンランドではホッキョククジラがほとんど姿を見せなくなった。1918～2009年の間にストライクを含めて大型クジラ65頭の捕獲しか記録されておらず，西グリーンランドでは20世紀に３頭だけであった（Higdon 2010: 197-202）。

ヨーロッパ諸国から来た捕鯨船の操業がイヌイト社会へ及ぼした影響は地域によって違いがある。当然ながら大型クジラが回遊していた西グリーンランドやディスコ湾周辺に捕鯨船が集まった。一方，東グリーンランドは海氷状況がつねに悪く，グリーンランド海の氷帯（ice belt）に阻まれ，クラベリング（Clavering）島以北の北東グリーンランドにヨーロッパの捕鯨船は進出できなかった。ヨーロッパ諸国の捕鯨船の捕鯨活動はイ

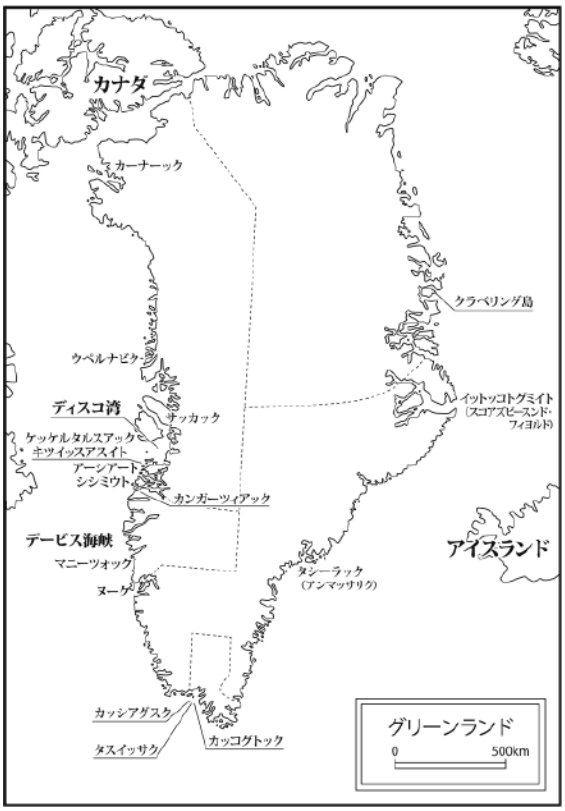


図１　グリーンランドの地図（筆者作成）

ヌイト社会全体に後述する文化的な影響を及ぼしたが，18世紀前半までは，イヌイトにとって交易品は日常必需品が少なく，影響はさほど大きくなかった。

## 3　商業捕鯨期にみるイヌイト社会の3つの変革期

以上の経済的な側面のほかに，18世紀に入ってイヌイト社会で３つの画期があった。一つは，天然痘の伝染である。デンマークへ連れていかれたイヌイトが天然痘に感染し，1733年にグリーンランドへ戻ってきた。そして一年経たないうちに，天然痘が蔓延してヌーク周辺が無人域と化したことにより，南グリーンランドのイヌイトがここへ勢力を広げたことである（Gullov 1987: 82）。これによって地域間の勢力関係に大きな変化が生じた。

二つ目の画期は，因果関係は必ずしも明らかではないが，ヨーロッパ諸国の捕鯨活動が一つのピークを迎えた18世紀初頭に現れた住居形態の変化である。それまでのイヌイト社会は基本的に一家族が住む円形・楕円形の比較的小さな家屋であったが，それに代わって，30〜40人が共同生活する長さ10〜15メートルの「長屋」（communal house）がヌーク地方で出現した（Gullov 1987: 82-83）。長屋がどのような社会的な条件によって出現したかについては不明な点があるが，西沿岸のマニーツォック，東海岸のタシーラック（Tasiilaq：かつてのアンマッサリク Ammassalik）までその分布が拡がった。その範囲は，ヨーロッパ諸国の捕鯨活動域とほぼ重なるので，長屋とヨーロッパ諸国の捕鯨活動との間に何らかの関係があると思われる。イヌイトが提供する食料──カリブー肉など──と水を補給するために捕鯨船が寄港する地点に交易を目当てにそれなりの数のイヌイトが集まったことは想定されている。比較的短い期間に一か所に多人数が集まる状況において，長屋を作る社会的な要因があったと思われる（Gullov 1987: 85, 1997: 388; Kalland and Sejersen 2005: 27）。

長屋が西沿岸と東沿岸の北へと分布範囲を拡げた背景にはもう一つの社会現象があった。南グリーンランドのイヌイトが釣り糸を作るバリーン（鯨の髭）などの材料を手に入れるため，そして情報交換などのためにヌーク周辺からディスコ湾周辺へ毎年，ときに100人ほどの集団で移動して，数か所にあったアーシビク（aasivik）と呼ばれる集合地に結集していた。南からの集団は自らクジラを捕ってバリーンを入手したのではなく，アーシビクの地域集団との交易を通じて入手した（Gullov 1987: 82; 2006）。南からの集団は集合地で一年過ごしてから南へ戻ると，入り替わりに別の集団が北上してくるという社会的現象があった。猟場などの優先権が地元の集団にあり，勝手にどこでも家屋を作ることには制約があったので，訪れてくる集団が一軒に集まって生活することも長屋が出現して普及する背景にあったかも知れない（Gullov 1987: 83-84）。

ただし，ヨーロッパ諸国の捕鯨船がグリーンランド周辺に来るようになったのより古

い時代からアーシビクの集合地が存在し，捕鯨船は効率的な交易のためにアーシビクの近く接岸したことがアーシビクの発展に拍車をかけたのか，集会場が捕鯨船との交易を目的に以前よりも多くのイヌイトを引きつける効果があったことなのかは，今後の研究課題である（Appelt 2006; Gullov 2006）。

イヌイトが造った長屋の基本的な形について，ノースの長屋が影響したとする確証はない（Gullov 1997: 388）が，私が調査したカッシアグスク（Qassiarsuk）にあるノース文化期の復元長屋をイヌイトの長屋と比較してもると，外見と間取りや構造がいくつもの点で近似していることは，偶然の一致なのか，あるいはノースの住居形式がイヌイト社会へ伝わったためなのかについて更なる考察が必要だと考える。というのは，ノースとイヌイトの間にどのような関係や交渉があったのもについてその全容は明らかになっていないからである。遺伝的な交渉はなかったとされる（Moltke et al. 2015: 55; 66）が，13〜15世紀にイヌイトとノースの間に広範囲にわたって物々交換があった（Gullov 2006）ので，イヌイト社会で広がった長屋にノースの影響があったのではないかと私は考えている。その根拠としてグリーンランド・イヌイトの長屋（図２ Lee and Reinhardt 2003: 12–13）とノースの長屋（写真１）の類似点が偶然の一致と思えないほど多くあるからである。

三つめの画期は，ヨーロッパ諸国からの捕鯨船の活動が19世紀に捕鯨からアザラシ猟へ転換したことである。

ヨーロッパの捕鯨活動によって東グリーンランドでクジラが激減したため，ヨーロッパ捕鯨船は脂身（blubber）を継続的に確保するために19世紀に入ると捕鯨からアザラシ猟に活動を切り替えた。多い年には100万頭ものアザラシを捕獲したとされ，その乱獲が原因でアザラシを中心とした経済であった東グリーンランドのイヌイトは一定期間，東グリーンランドからいなくなった（Gullov 2010: 361）。

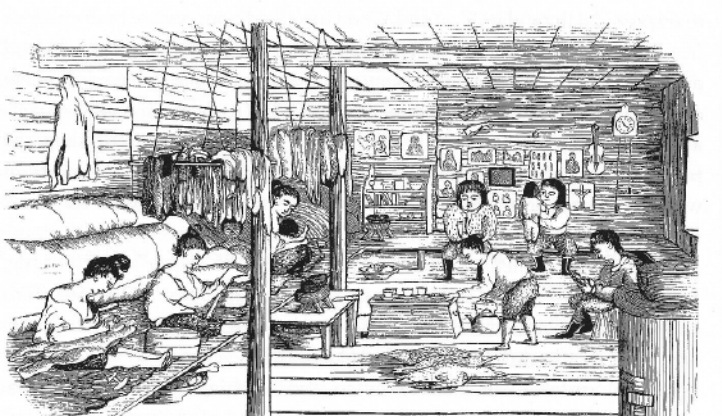

図２　19世紀イヌイト社会の長屋（Lee and Reinhardt 2003: 12）

写真１　ノース文化期の長屋（復元）（2013年９月２日，カッシアグスク，筆者撮影）

## 4　20世紀グリーンランドの捕鯨

18世紀のデンマーク王立グリーンランド交易会社（Royal Greenland Trading Department: Den Kongelige Grønlandske Handel, 略称 KGH）は大型クジラの捕鯨事業にイヌイトを乗組員および解体労働者として雇っていたが，ヨーロッパの捕鯨船の乱獲によるクジラ数の減少のため，KGH は捕鯨事業をいったん取りやめた。KGH は捕鯨事業から撤退した後も，イヌイトの捕鯨は皮船のカヤックとウミアックが木造船に取って代わったなど，20世紀までにイヌイトの捕鯨活動に変化はあったものの，漁法は基本的にチューレ文化期のやり方とさほど変わらなかった。

ところが，20世紀に入ってグリーンランド・イヌイトによる捕鯨の様子は様変わりした。1924年にKGH が購入したノルウェー製の本格的な捕鯨船（キャッチャーボート）ソンヤ（Sonja）号が西グリーンランド近海で捕鯨を開始した。乗組員が全員デンマーク人だったソンヤ号は1928年までは捕ったクジラを解体・鯨油を精製する船に渡していたが，1929年から食料危機に陥っていた西グリーンランドの村々を救済するためにクジラを村へ運んで，住民は解体した肉をもらい，脂身をコペンハーゲンで競りにかけた利益でソンヤ号の運用費に充てた。1925年にシロナガスクジラ，ナガスクジラ，ザトウクジラ，マッコウクジラを合計25頭捕獲して，1940年までの15年間で年平均23頭を捕った。しかし，年々捕獲量がすくなくなり，1958年にKGH は捕鯨から手を引いた（Caulfield 1997a:

85–90; Jervin 1997: 153)。

1948年にアーシアートのイヌイトが捕鯨砲を装備した動力船でミンククジラをとりはじめ，のちにナガスクジラやシロナガスクジラに捕鯨対象を拡げた。1965年にこのような漁業兼捕鯨船の数が45隻に増え，1961～1965年の間に200頭が捕獲された。ここで注意しなければならないことは兼業船の本業は漁業であり，その傍ら機会を見てクジラを捕る漁師が多かったことである（Caulfield 1997a: 89–90)。

1970年代からヨーロッパで起きた反アザラシ猟運動の影響が広がった東グリーンランドでは，それまでアザラシ猟に使っていた船外機つき小船をクジラ漁に転用しため，1983年を境にクジラの捕獲数が急増した（Caulfield 1997a: 85–93)。

グリーンランドは現在，ほぼ全域で捕鯨が行なわれている（Helms et al. 1997: 61）が，北部と東部ではシロイルカとイッカクだけが対象となっており，ほとんど回遊してこない大型クジラは1970～1980年代に捕獲した例はない。

## 5　協同漁

1950年代以降のグリーンランドでは，捕鯨の２つのやり方が定着した。ほぼ各地でみられるのは複数の２人乗り船外機つき小船が参加する協同漁である（Caulfield 1997a: 96; Helms et al. 1997: 75)。地域差はあるが小船を捕鯨目的に出してクジラを探すのではなく，クジラが沿岸に現われたときに必要があれば追うという。捕鯨用具は銛，浮子と法律で定められている口径7.62mmないし９mmのライフルである。タシーラック（Tasiiraq: 2015年調査ノート）のように協同漁は５隻以上という規定があるところもあるが，とくに規制がないところもある。小船同士のコミュニケーションは最近まで手振りの合図だったが，現在は携帯無線機や携帯電話で連絡を取り合う。クジラを入江に追い込んで，解体に適したところの近くで仕留める（Helms et al. 1997: 74–75; Larsen and Hansen 1997: 204)。1995年以降，追い込み猟は禁止されている（Kalland and Sejersen 2005: 37; Rasmussen 2008: 216）が，フィヨルドや入江に入ってきたクジラが外海に逃げないよう，入口で小船が一列に並ぶ。

協同漁は対象の鯨種，季節や地域によって変異はあるが，具体的な例としてデール（Dahl 2000: 68–92）が調査したサッカックの10月漁を取りあげる。北グリーンランドのサッカック（Saqqaq）では，海氷がなくなる春にシロイルカとイッカクが北上して，10月後半～11月初旬に南下する季節に老若男女が参加する町ぐるみの大騒ぎになる。10月末にオオカミウオ（wolffish：Anarhichas lupus）が延縄にかからなくなったという報告を受けると，村中が朝から晩まで海の見張りをつづける体勢に入る。ある日突然「キラルッカト」(qilalukkat：シロイルカ）という叫び声で学校授業も打ち切られ，教員を含む村中の男たちが船へ走っていく。先発した船はシロイルカが外洋へ逃げないよう入江

に閉じ込める。呼吸するために海面に姿を現わすシロイルカを一斉にライフルで撃つ。シロイルカが船に近づけば，ガソリン用10ℓの空のポリタンクがつないである銛を打ち込んで，ポリタンクを追いながらシロイルカが海面に姿を現すとライフルで止めを刺す。

仕留めたシロイルカを曳航して村に戻り，数時間の休息の後，解体，仕分けと分配の作業がはじまる。解体は原則として男の役割であるが，女が参加することもある。解体は2～4センチの脂身の付いた皮（マッタク）を背と腹，そして頭部からはがし終わったら，肉を切り落とす。解体している間，誰でもマッタクの片を切って食べることができる。サッカックに近いケッケルタルスアック（Qeqertarsuaq）のミンククジラ漁は同じ要領で行なわれる（Caulfield 1997a: 98-106）。

解体が終わったら肉とマッタクの分配がはじまる。漁に参加した船の数と同じ数の山にマッタクと肉をそれぞれ分けて，図3に示してある方式に従って分配される。図の上に描かれている者は船主（この例では10隻分）であり，「A」はⅠ～Ⅹの一つの山を指して，「B」は背後の肉・マッタクの山を見ないで一人の船主を指す。どの船主はどの山に当たるかは選ぶことができないので，肉とマッタクが公平に分配される。この図では，「B」が指した船主「9a」は「Ⅵ」の山をもらう。

一昔前のカヤックを使った捕鯨の時代では，最初に銛を打ったハンターが珍味とされる部分を優先的にもらい，クジラを仕留めるのに駆け付けてくれた順にもらう部位が決まっていた。図4は4隻のカヤックの事例であるが，現在は原則として均等に分配される。それは，複数の高馬力の船外機つき小舟でクジラを追跡して近づいた後，複数のハ

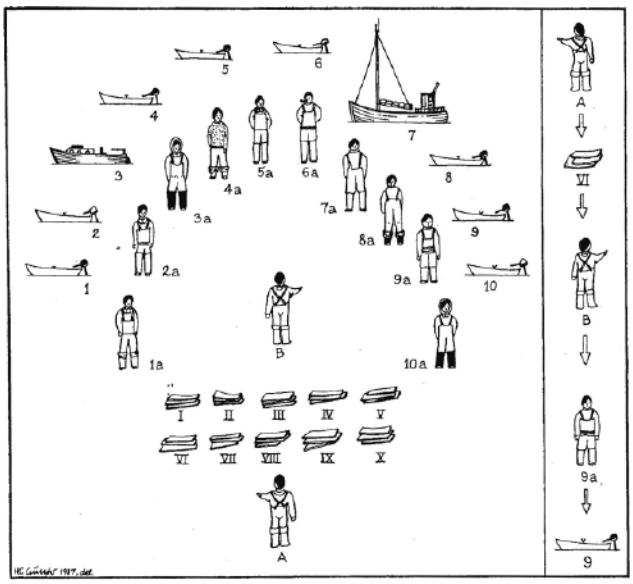


図3　鯨肉分配（Dahl 2000: 86）

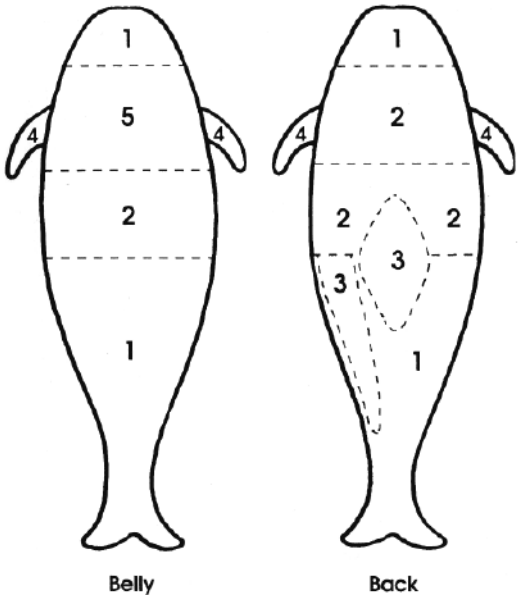


図 4　20世紀前半の鯨肉分配（Dahl 2000: 95）

ンターが高性能ライフルを一斉に発砲するので，誰が「一番槍」なのか分からず，今のような方式が自然に決まってきたようである。図 4 の「1」は一番銛のハンターの取り分であり，「5」は一番銛のハンターが村全戸に配る分を含んでいる特別枠である。

以上の協同漁は南ディスコ湾のカンガーツィアック（Kangaatsiaq）や北部東グリーンランドのイットッコトグミイト（Ittoqqortoormiit）でも大同小異である（Larsen 1997: 115–116; Larsen and Hansen 1997: 201–208）。

## 6　漁業兼捕鯨船による捕鯨

本業は漁業――エビやタラ，オヒョウなど――である漁船は捕鯨専用の船ではなく，漁のついでに機会があればクジラも捕獲する。捕鯨を行なう場合，1991年の法律によりペンスリット（penthrite）爆薬を使ったグレネード（爆発銛）を舳先に装備した船ではなければならない（IWC 2003: 17; Kalland and Sejersen 2005: 74）。漁船兼捕鯨船を使った北部グリーンランドのケッケルタルスアックと南西部のカッコグトック（Qaqortoq）で行なわれている捕鯨を事例に紹介しよう。

カッコグトック（Josefsen 1997）では，漁船による捕鯨は原則的に漁業の繁忙期以外の時期に行なわれるが，村で鯨肉が不足するような状況だと，繁忙期でも捕鯨することがある。船外機つき小型ボートによるシロイルカなどの小型クジラ漁と異なり，ミンク

クジラよりも大型のクジラを対象とする漁船は捕獲枠（quota）の割り当てをもらわなければならない。カッコグトックのミンククジラの割り当ては1990年代には全国の60頭の内の１頭であり，ナガスクジラは全国の23頭の１頭であった。鯨種ごとの捕獲枠は1989年のIWC決定によるが，グリーンランド内の割り当ては自治政府と行政区（municipality）の議会と漁労／漁業・狩猟組合（The Association of Fishers & Hunters in Greenland, Kalaallit Nunaanni Aalisartut Piniartullu Kattuffiat，略称KNAPK）の合議によって決まる。行政区の割り当てがなくなれば，その種のクジラは当年度には捕獲できなくなる。

カッコグトックの漁業兼捕鯨船乗組員の人選に関する慣例（しきたり）はないが，後述のケッケルタルスアックでは船主の親類を中心に選ばれる。

捕鯨シーズンが近づいてくるとカッコグトック村の雰囲気は何となくそわそわしてくる。近海にミンククジラが多く見かけられる，と漁師から情報が伝わってくると，漁業兼捕鯨船は出港してクジラのいる海域を目指していく。船は捕鯨砲の命中率をよくするためにミンククジラが進んでいく方向と直角の位置を保ちつつ接近して捕鯨砲の銛を発射する。クジラが即死しない場合，ライフルを持った船員が船外機つき小型ボートに乗り移って至近距離から止めを刺す。仕留めたクジラが沈まないうちに銛綱で漁船へ引き寄せて解体の場へ引いていく。なだらかに海へ傾斜する岩盤の浜が理想的な解体場である。満潮時に岩盤の上へ船外機つき小型ボートでクジラを引き上げて，引き潮時間帯に岩盤が露出すると解体する。マッタク，ひれ，肉，心臓を５～10キロの大きさに解体包丁で切り出して，骨に残っている肉（「中落ち」）はほしい人が勝手にそぎ取って持って帰る。

分配はとくに決まった方式はなく，この事例では解体に協力した人に500～600キロにのぼる腹肉，マッタク，心臓と尾びれ・胸びれを皆で分配する。分け前をもらった人たちは家族が食べる分とプレゼント用に持って帰る。船員は一人当たり60～80キロ，解体に協力した人は平均して30～40キロを分けてもらう。

肉とマッタクは港にある小規模の公設市場カラーリアラック（kalaaliaraq）でも販売される。価格は毎年，KNAPKによって決まり，そのシーズン内は変動しない。１頭のミンククジラの肉などは4,000キロほどあり，解体現場での分配が完了したあと，残りの40％は市場，もしくは加工会社へ，24％は個人的な取引，16％は病院や学校などの施設に売られる。市場での販売価格はキロあたり，鯨肉一般が当時の相場ではおよそ750円（現510円），珍味の腹肉とマッタクがおよそ875円（現595円）であった（Josefsen 1997: 232–234）。

次にケッケルタルスアックの事例について述べる。1989年に西グリーンランドの捕鯨砲完備の漁業兼捕鯨船は60隻を数えたが，ケッケルタルスアックにある２隻の内の１隻が行なった捕鯨の様子をかいつまんで次のようにまとめる（Caulfield 1997a: 93–98; Tejsner 2014: 3–4）。

漁業兼捕鯨船の捕鯨砲銛の綱は長さ50mのナイロン／ポリエステル綱と径14mm，長さ600mのワイヤーケーブルをつないだものであり，両者の結び目に大きなプラスチック浮子を取りつける。捕鯨のとき，船主の核家族，あるいは拡大家族の中から選ばれる4～6人が乗り組む。

前にも述べたように，漁師などからの情報を参考に捕鯨することを船主が決断するのであって，わざわざクジラを探しに行くことはしない。クジラの在処はあらかじめ見当をつけているので，銛を打ち込むまでの追跡時間はミンククジラの場合1時間ほど，速く泳ぐナガスクジラの場合数時間がかかる。クジラは爆発銛が命中してから平均5分ぐらいで息絶える。

この地域の漁業兼捕鯨船の多くはエビ漁を主業としているので，カッコグトックと同様に収入がエビ漁の1％程度にしかならない捕鯨は村で食料不足などの緊急な事情がなければ，エビ漁の最盛期を外して捕鯨する。

仕留めたクジラを村の近くへ曳航した後で，大きな包丁で解体する。解体は協力する人数によるが，ミンククジラは3～4時間，ナガスクジラは6～10時間かかる。船主と船長は肉など40～50％をもらって燃料代などの費用をまかなう。解体された肉とマッタクは船主と船長の取り分を除いて，社会関係，文化的な規範と経済的な配慮が複雑に絡み合う分配ネットワークで流通する。分配ネットワークの第一段階は捕獲と解体に直接に関わった人たち同士，第二段階は第一段階の人たちのほかの家族に分ける，第三段階は分け前をもらった第二段階の人が分配する鯨産物がコミュニティで広く流通する。分配される肉とマッタクは無償に分けることも，市場で現金取引もあるが，販売による現金のやりとりはグリーンランド社会ではさほど大きな意味を持たず，伝統的な分配の一形態と受け止められている。

鯨肉の公設市場での販売価格はカッコグトックと少々違って，漁労／漁業・狩猟組合とローヤル・グリーンランド社との協議によって毎年，決定される（Caulfield 1997a: 105–106）。

## 7　分配をめぐる確執

鯨肉やマッタクの分配をめぐって，漁業兼捕鯨船と船外機つき小型ボートの船主の間に確執が生じている。協同漁に両型の船が参加する場合，船の大きさに関係なく肉などが分けられる原則に対して，漁業兼捕鯨船は運航費と維持費が高く，また捕鯨は生活を支える経済活動であるとし，それに見合う比率の分配を認めるべきだと主張する。一方，船外機つき小型ボートの持ち主は大型クジラの捕鯨が禁止されているので，小型クジラ漁はコミュニティの社会関係を維持するために不可欠な活動であるとし，漁の成果を平等に分配する方式を譲らない（Sejersen 2001: 436; Tejsner 2014: 7–8）。

大型クジラの捕獲枠はIWCが決めるものであり，グリーンランドは先住民捕鯨というカテゴリーとして割り当てがある（詳しくは岩崎 2011および高橋論文参照）。なお，2013～2018年間の各鯨種は次の通りである（浜口 2016: 40; International Whaling Commission n.d.）。グリーンランド全体の捕獲枠と繰り越し枠は，ホッキョククジラは年に2頭，割り当ての残りがあれば次年度に繰り越し2頭分のストライク，ナガスクジラは年に19頭のストライクまで，しかし割り当ての残りが次年度に何ストライクまで繰り越せるかについて情報はない。ミンククジラは2015～2018年の間に164頭のストライク，割り当ての残りは次年度に15頭ストライクまで繰り越せる。ザトウクジラは2015～2018年の間に10頭のストライク，割り当ての残りは次年度に2頭ストライクまで繰り越せる。

捕獲枠は各自治体への割り当ては漁業・狩猟・農業省（Ministry for Fishing, Hunting and Agriculture）が毎年発表して，KNAPKおよび地方自治体連合（Association of Municipalities, KANUKOK）との協議を経て確定する。IWCの管轄下にないイッカクとシロイルカに対しては2005年からグリーンランドは独自の捕獲枠を設定している。2016年の捕獲上限数はイッカクが522頭，シロイルカが340頭である（cf., Ugarte and Heide-Jørgensen 2007）。

なお，捕獲が禁止されていたザトウクジラは2010年からIWCによる捕獲枠が認められた。ネズミイルカ，バンドウイルカ，ゴンドウクジラ，シャチ，カマイルカ，ハナジロカマイルカにたいしてIWCによる捕獲規制はないが，グリーンランド政府は独自の割り当てを決めている。

## 8 狩猟免許証

捕鯨を含めて，漁撈／漁業と狩猟をするためにはグリーンランド政府が発行する免許証が必要である。専従ハンター（occupational hunter, professional hunter, full-time hunter, green licenceなど）とパートタイム・ハンター（part-time hunter, non-occupational hunter, non-professional, leisure hunters, sportsmen, red licenceなど）の二種類の免許があり，いずれも1999年の法改定では，申請者は次の要件を満たなければならない：①グリーンランド社会と深い関係のあること，②2年以上の住民登録をしていること，③過去2年以上の納税義務を果たしたこと，④現住所は2年以上グリーンランドにあること，そして以上に加えて専従免許には⑤年収の50％以上は漁労／漁業と狩猟によることという条件がある。免許証を受けると毎年，成果を報告しなければならない。パートタイム・ハンターの免許証は自家消費の生業活動を前提としたカテゴリーであり，捕獲できる獲物と数量は制限されている（Statistics Greenland 2017）。なお，捕鯨には原則として専従免許証が必要であるが，ウペルナビク，カーナーック（Qaanaaq）とイットッコトグミイトではシロイルカとイッカククジラに限って，パートタイム・ハンターも捕獲できる

(Caulfield 1997b: 272; Rasmussen 2008: 215–216)。なお，1945年にいたおよそ8,000人の専従ハンター（Rasmussen 2008: 224）は2015年には1,984人にまで減少している（Statistics Greenland 2017: 13)。

## 9　捕鯨をめぐる儀礼とタブー――グリーンランドの場合

捕鯨することと鯨肉を食べることはグリーンランド・イヌイトのアイデンティティと密接に係わっているとされていること（e.g., Caulfield 1997a: 89; 1997b: 249; Searles 2002; Sejersen 2001: 434）を念頭に，捕鯨をめぐる儀礼やタブーがあると予断して調査を開始した。ヌークでもディスコ湾周辺の村々でもよく見かける髭鯨類の下顎骨で造ったアーチ（写真２）がその思いを一層強くした。それに，10回ほど招待された誕生日や記念日，洗礼を祝う席（kaffemik）（Caulfield 1997a: 70; Sejersen 2001: 434; Sowa 2016: 171）で，必ず鯨肉料理とマッタクが出ていることを実際見ていることも，筆者の予測は的中しているように思えた。

しかし，詳細を調査してみると，現地で誰に聞いても捕鯨に関する儀礼を知らないと言われ，実際，現代の狩猟儀礼は確認できなかった。アラスカなどでは，クジラをはじ

写真２　クジラ下顎骨アーチ（2017年６月27日，アーシアート，筆者撮影）

めとして，獲物に関連する儀礼は数え切れないほど多く知られている（たとえばLantis 1938; Lowenstein 1993; Soby 1969/70）ので，グリーンランドにはないはずがないという気になって，アーシアートの北22キロの海上に浮かぶ小さな島キツイッスアスイト（Kitsissuarsuit）の古老が知っているだろうという情報を得て出かけて行った。2016年７月に捕鯨経験のある２人の80代のハンターに会い，数時間のインタビューを行なったが，２人ともクジラをはじめ，獲物全般に対する儀礼は知らないと言明した。私はカナダ・ヌナブト準州クガールク（Kugaaruk）で収集した事例を示してさらに詮索してみたが，グリーンランドでは獲物をめぐる儀礼はないという主張は変わらなかった。そのほかのインフォーマントにも「とくにない」などと言われ，次の一例を除いては現代のグリーンランドではクジラに関連する儀礼を確認できなかった。

調査で得た獲物をめぐる儀礼について唯一の情報は2016年にカーナーックで会ったフランスからグリーンランドへ調査に来ていた文化人類学者の教示によるものである。捕獲したクジラの肉片を海に投げるというものだったが，その情報を独自に確認することはできなかった。

現代では，クジラをめぐる儀礼が確認できなかったことを不思議に思った背景には，以下に記すクジラをめぐってタブーを含む種々の儀礼的な活動がグリーンランドの古い民族誌に記されているからである。

・捕鯨活動が行なわれている間，女性たちが石ランプを消して暗い室内でじっとして待機していなければならない（Caulfield 1997a: 83）。
・村の人たちが活動すれば，ハンターが狙っているクジラが活発に動き，とりそこなう結果を招く（Soby 1969/70: 47; 53）。
・クジラ（シロイルカ）を撃つ銃声が聞こえたら，女性たちは浜へ走って，両手で海水を汲み出す動作を繰り返す。クジラが潜って逃げられないよう海を空っぽにする呪いだ（Birket-Smith 1924: 335）。
・ハンターはクジラを撃つ銃弾を軽石でこする（Birket-Smith 1924: 335）。これも獲物が沈まない呪い。
・捕鯨用の銛柄にライチョウの爪やワシの嘴を縛りつける（Soby 1969/70: 49）。
・進む方向に鼻を向けたキツネの頭骨を船の舳先に置く（Soby 1969/70: 49）。
・出漁に際して，船と捕鯨用具をきれいに掃除して，ハンターは汚れていない服で盛装する（Egede 1973: 102）。
・仕留めたイッカクの頭頂の皮片を２か所はがして，片方の眼球をくりぬき，氷丘に埋めた後，もう一方の眼球を切り出して食べる（Whitney 1910: 362–363）。
・クジラが船にまつわりつく場合，海にナイフを落とせばクジラは離れていく（Larsen and Hansen 1997: 207）。

以上はクジラに限った民族誌調査の結果であり，アザラシやカリブーなどのほかの獲物に関連する儀礼やタブーを加えれば無数にある。18世紀から20世紀初頭までは，グリーンランドでこれほどの儀礼が行なわれていたにもかかわらず，現在，儀礼はないとするインフォーマントの情報はどのように理解すべきだろうか。長期住み込みの参与観察的な調査をしていないことを断わった上で，グリーンランドにおける獲物に対する儀礼的行動が衰退したことについて考えてみよう。

18〜20世紀前半まで獲物をめぐる多くの儀礼やタブーが民族誌で記録されているにもかかわらず，現地調査で確認できなかった背景には，17〜20世紀の間にヨーロッパ諸国による商業捕鯨のためグリーンランド周辺では大型クジラが激減して，イヌイトによる捕鯨活動が廃り（Gad 1984: 566），儀礼に関する情報が伝わらなくなったことがあり得ないだろうか。しかし，減少したとはいえ，私たちの主な調査地であるディスコ湾周辺などのいくつかの地域で大型クジラ漁がつづいているし，ミンククジラを含めてクジラの捕獲は途絶えていない（e.g., Dahl 2000: 105; Helms et al. 1997: 73–74）。ほかの獲物（アザラシ，カリブーなど）の儀礼に関しても情報は得られなかったので，クジラの減少は儀礼行動の欠如の理由にならない。

ヌナブト準州のクガールクでは夏の海氷状況により数百年前から1990年代までの間に大型クジラが回遊できなくなった（Kalland and Sejersen 2005: 29）が，そのほかの獲物に対する儀礼やタブーは現在も多数伝わっている（たとえばスチュアート1992: 78–80; Stewart 2005: 354–356）。

おおよそ300年にわたるグリーンランドにおける植民地的な支配の影響が原因として挙げられるが，デンマークが実施してきた支配はアメリカやカナダの支配に比べて穏健であったのに対し（本多 2005: 214–218），過酷な支配下に置かれていたアラスカでは，儀礼行動が現代まで継承されていることから，植民地的な支配のあり方による説明も成立しない。

調査不足の可能性を排除しないが，現時点ではグリーンランドにおいて獲物に対する目立った儀礼行動はないとする（cf., Helms et al. 1997: 80）が，ない理由を究明することができなかった。「今日（こんにち）のグリーンランドでは自然に対して功利的な（utilitarian）態度がとられ，カナダやアラスカに比べて儀礼は少ない上，簡略されている」とする研究者（Kalland and Sejersen 2005: 267）はいるが，そうした態度が生じた背景について，管見の限り研究はない。その原因はともかく，儀礼的な行動はほかの地域に比較して低調である現状は事実のようである。

## 10　鯨肉の需要と供給

鯨肉はどのぐらい消費されているのかを確認するために各地に支店のある大手スーパ

ー３社の売り場を調べた。輸入の豚肉や牛肉，国産の羊肉に比べて，予想していたほど鯨肉売り場の面積は大きくなく，販売量も多くなかった。ヌーク中心部にある公設市場カラーリアラック（kalaaliaraq）では量が少ない日はあったものの，2007～2017年の間に10数回，現地で確認したヌークでは，毎日鯨肉があったが，地域によって鯨肉もマッタクも置いていな支店もあった。

年間の販売量を知るために店長や売り場担当者にインタビューを行なった。ある大型店舗で思いがけなく全支店の年間仕入れと販売実績の一覧表を入手できた。予想に反して販売量より多くの鯨肉が廃棄処分されていたことが判明した。その資料によると，全支店の年間統計では鯨肉入荷量の約18,000kg の内，およそ70％の12,242kg が廃棄処分されたと記されている。それは平均的な大きさのミンククジラのおよそ７頭分，あるいはおよそ36頭分のシロイルカに相当する量である。なお，この会社はグリーンランド政府の政策によって一定量の鯨肉を買い入れる義務が課せられている可能性があるので，上に挙げた統計に対する解釈は慎重でなければならない。

会社や支店の間に違いはあるが，ヌーク中心部の公設市場カラーリアラック以外の店では鯨肉は必ずしも売れ筋の商品ではない印象を強く持ったのである。ただし，スーパー以外の販売ルートとして，公設市場と，入荷のときだけに開かれる各地の私設市場カラーリミネグニアフィク（kalaalimineerniafik）で購入される多くの鯨肉やマッタクが分配・再分配ネットワークで流通するので，その事実も加味して鯨肉の消費量に対して考察しなければならない。

グリーンランドでは，鯨肉の需要が供給を上回って折り，十分に出回っていないとする研究（Petersen et al. 1997: 36）があるが，スーパーマーケットで廃棄処分の量をみると，鯨肉は果たして不足しているだろうかについては，慎重に検討する必要がある。グリーンランド・イヌイトの鯨肉（含むマッタク）に関する数少ない研究によると，平均的に鯨肉は１週間に１回約116gを食べる。牛や豚の輸入肉よりも，鯨肉を含めた伝統食を好む比率が高いのは年配層である（Jeppesen 2012: 9; 30–38）。数名の若い男女（20～30代）に対して行なった立ち話的なインタビューの結果は，これらの統計に矛盾しない。インタビューの質問「牛，豚，鶏，マトンと鯨の内，どれが一番好きですか」について，鯨肉を一番にあげた若者はいなかった。

鯨肉を食べる習慣について考えさせられた経験がある。４回にわたって合計23日間泊めてもらった南グリーンランドの家では１回だけ鯨肉が出された。それは鯨肉をよく食べるかについて2016年に問うたことをきっかけに2017年に食べさせてもらった「鯨ロース」だったように思えて，言うほど実際に鯨肉が食卓にのぼるだろうかと疑問をいだいた。

捕鯨肉食についてアーシアートでインタビューした男性（45歳）は，若い人はあまり鯨肉を食べないようであるがそれはどうしてなのか，という質問に答えて，年を取るに

つれ鯨肉を食べるようになると説明してくれた。

しかし，グリーンランド・イヌイトが鯨肉を食べることはエスニック・アイデンティティの根底にあるとする解釈について，前に書いたが，そうした前提論がグリーンランド・イヌイトの食生活の実態に合致しているかどうか，前提論を排除した分析は今後必要であると考える。

## 11 まとめ

人類がグリーンランドへ移動した4500年前当初からクジラを積極的に利用してきたが，環境的な変化――寒冷化など――と外部からの影響――ヨーロッパの捕鯨船の進出など――によって，グリーンランド・イヌイトとクジラの係わり合いが変遷しつつ現代にいたっている。

17世紀にヨーロッパの捕鯨船が来航するまでは，地域によるその度合いは異なるがクジラは重要な食料源，建材，道具の作成材料であった。グリーンランド周辺でのヨーロッパの捕鯨活動を契機にイヌイトはグローバル経済に取り込まれ，クジラをめぐる経済的，文化的，社会的な意義が変わってきた。乱獲のため商業捕鯨が行き詰まった東グリーンランドでは，ヨーロッパが捕鯨からアザラシ猟に捕獲対象を切り替えたことは，アザラシを中心としたこの地域のイヌイト社会に致命的な影響を与える結果を招いた。一時イヌイトはこの地から姿を消すほどの事態に至った。

銃などの製品が手に入ったものの，1940年代まではイヌイトの捕鯨方法はさほど大きく変質しなかったが，1950年代以降，イヌイトによる捕鯨活動が機械化するにつれ，船外機つき小型ボートを駆使する協同漁と，漁船を使う捕鯨が発展している。

それに国際的な制約が加わる状況において，捕鯨およびクジラそのものがエスニック・シンボル，そして抵抗の旗印という意義をもつようになっている。そうしたシンボル化が確立している現代，なぜかクジラに関わる儀礼が20世紀後半から継承されていないのかという逆説的な現状になっている事態を解明する課題が残っている。

先住民生業捕鯨に関連してとくにグリーンランドで問題になっている鯨産物の現金売買（岩崎 2010: 25–33; Kalland and Sejersen 2005: 45–46, 266; Nuttall 1992: 26）や伝統的な生業活動とエスニック・アイデンティティをめぐる議論（Jervin 1997; Nuttall 1992）についての論究は，紙幅の関係で別の機会に譲ることとする。

### 謝辞

鯨種の日本語についてご教示してくださった下関海洋科学アカデミー鯨類研究室 室長の石川 創氏，グリーンランド政府のデンマーク語の翻訳について北海道大学北極域研究センター助教の高橋

美野梨氏，グリーンランド地名地図を作製してくださった笹谷めぐみ氏に謝意を表する次第である。

## 参照文献

Appelt, M.

2006 Gathering Sites as Focal Places in Prehistoric Greenland. In J. Arneborg and B. Gronnow (eds.) *Dynamics of Northern Societies*, pp. 215–224. Aarhus: Aarhus University Press.

Birket-Smith, K.

1924 Ethnography of the Egedesminde District with Aspects of the General Culture of West Greenland. *Meddelelser om Gronland* 66. Copenhagen: C.A. Reitzels Forlag.

Caulfield, R.

1997a *Greenlanders, Whales, and Whaling: Sustainability and Self-determination in the Arctic*. Hanover: University Press of New England.

1997b Greenland Inuit Whaling in Qaqertarsuaq Commune. In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 239–260. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Dahl, J.

2000 *Saqqaq: An Inuit Hunting Community in the Modern World*. Toronto: University of Toronto Press.

Gad, F.

1984 History of Colonial Greenland. In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians: Arctic* Vol. 5, pp. 556–576. Washington DC: Smithsonian Institution.

Gullov, H.

1987 Dutch Whaling and Its Influence on Eskimo Culture in Greenland. In L. Hacquebord and R. Vaughan (eds.) *Between Greenland and America: Cross-cultural Contacts and the Environment in the Baffin Bay Area*, pp. 75–94. Groningen: Arctic Centre, University of Groningen.

1997 From Middle Ages to Colonial Times: Archaeological and Ethnohistorical Studies of the Thule Culture in South West Greenland 1300–1800 AD. *Meddelelser om Gronland, Man & Society* 23. Commission for Scientific Research in Greenland. Roskilde: Roskilde University.

2006 Aasiviit as Focal Places in Historical Greenland. In J. Arneborg and B. Gronnow (eds.) *Dynamics of Northern Societies*, pp. 209–214. Aarhus: Aarhus University Press.

2010 Commercial Hunting Activities in the Greenland Sea, The Impact of the European Blubber Industry on East Greenland Inuit Societies. *Danish Journal of Geography* 110(2): 357–363.

Helgason, A. et al.

2006 mtDNA Variation in Inuit Populations of Greenland and Canada: Migration History and Population Structure. *American Journal of Physical Anthropology* 130: 123–134.

Helms, P., O. Hertz, and F. O. Kapel
1997 The Greenland Aboriginal Whale Hunt. In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 55–92. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Higdon, J.
2010 Commercial and Subsistence Harvests of Bowhead Whales in Eastern Canada and West Greenland. *Journal of Cetacean Research & Management* 11(2): 185–216.

本多俊和（スチュアート ヘンリ）
2005 「メディアと先住民――表象する側とされる側」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭編『先住民の世界』pp. 211–225, 東京：放送大学教育振興会。
2017 「地球のてっぺんから世界を見る――極北地帯の研究事例をヒントに」『文化人類学研究』18: 180–183。

IWC (International Whaling Commission)
2003 Annual Report of the International Whaling Commission 2002. Cambridge: International Whaling Commission.
n.d. Catch Limits and Catches Taken, International Whaling Commission https://iwc.int/catches (2018年 8 月31日閲覧)

Jeppesen, C.
2012 *Traditional Food in Greenland: Relation to Dietary Recommendations, Biomarkers and Glucose Intolerance*. Odense: The National Institute of Public Health, Faculty of Health Science, University of Southern Denmark.

Jervin, J. (with contributions by J. Dahl, P. Helm, and R. Petersen 1989)
1997 Greenland Subsistence Hunting. In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 127–188. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Josefsen, E.
1997 Cutter Hunting of Minke Whale in Qaqortoq (Greenland). In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 221–238. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Kalland, A. and F. Sejersen
2005 *Marine Mammals and Northern Cultures*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press.

Lantis, M.
1938 The Alaskan Whale Cult and its Affinities. *American Anthropologist* 40: 438–464.

Larsen, F.
1997 Scoresbysund: A Hunting Community in East Greenland. In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 101–126. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Larsen, S. and K. Hansen
1997 Inuit and Whales at Sarfaq (Greenland). In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 189–220. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Lee, M. and G. Reinhardt
2003 *Eskimo Architecture: Dwelling and Structure in the Early Historic Period*. Fairbanks: University of Alaska Press.

Lowenstein, T.
1993 *Ancient Land: Sacred Whale: The Inuit Hunt and its Rituals*. New York: Farrar, Straus and Giroux.

Matthews, J. and K. Briffa
2005 The Little Ice Age: Re-Evaluation of an Evolving Concept. *Geografiska Annaler*. 87A(1): 17–36.

Moltke, I. et al.
2015 Uncovering the Genetic History of the Present-Day Greenlandic Population. *American Journal of Human Genetics* 96: 54–69.

Newton, J.
2005 Thule Culture. In M. Nuttall (ed.) *Encyclopedia of the Arctic*, pp. 2026–2027. Routledge: London.

Nuttall, M.
1992 *Arctic Homeland: Kinship, Community and Development in Northwest Greenland*. London: Belhaven Press.
2005 Greenland Inuit. In M. Nuttall (ed.) *Encyclopedia of the Arctic*, pp. 790–795. London: Routledge.

Petersen, R., E. Lemke, and F. O. Kapel
1997 Subsistence Whaling in Greenland., In M. G. Stevenson, A. Madsen, and E. L. Maloney (eds.) *The Anthropology of Community-based Whaling in Greenland: A Collection of Papers Submitted to the International Whaling Commission*, pp. 27–54. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Rasmussen, R.
2008 Resource Management and Institutional Structures in Greenland. In G. Duhaime and N. Bernard (eds.) *Arctic Food Security*, pp. 203–226. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press.

Searles, E.
2002 Food and the Making of Modern Inuit Identities. *Food & Foodways* 10: 55–78.

Sejersen, F.
2001 Hunting and Management of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in Greenland: Changing Strategies to Cope with New National and Local Interests. *Arctic* 54(4): 431–443.

Soby, R.
1969/70 The Eskimo Animal Cult. *Folk* 11–12: 43–78.

Sowa, F.

2013 Relations of Power & Domination in a World Polity: The Politics of Indigeneity & National Identity in Greenland. *Arctic Yearbook 2013*, pp. 184–194. UArctic Institute: The Northern Research Forum.

2016 Indigenous People of the North and the Globalized World. In R. Kallenborn (ed.) *Implications and Consequences of Anthropogenic Pollution in Polar Environments*, pp. 157–179. Heidelberg: Springer-Verlag Berlin.

Statistics Greenland

2017 *Greenland in Figures*. Nuuk: Statistics Greenland.

Stewart, H.

2005 The Fish Tale that is Never Told: A Reconsideration of the Importance of Fishing in Inuit Societies. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67), pp. 345–363. Osaka: National Museum of Ethnology.

スチュアート ヘンリ

1992 「定住と生業――ネツリック・イヌイットの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」『第6回北方民族文化シンポジウム報告』pp. 75–87, 網走：北方文化振興協会。

2016 「呼称について――北方先住民族の名乗りと名付け」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp. 28–33, 東京：明石書店。

Tejsner, P.

2014 Quota Disputes and Subsistence Whaling in Qeqertarsuaq, Greenland. *Polar Record* 50(4): 1–10.

Ugarte, F. and M. P. Heide-Jørgensen

2007 *Standing Non-Detriment Findings for Exports from Greenland of Products Derived from Beluga* (*Delphinapterus leucas*). Nuuk: Greenland Institute of Natural Resources.

Whitney, H.

1910 *Hunting with the Eskimos: The Unique Record of a Sportsman's Year among the Northernmost Tribe—The Big Game Hunting, the Native life, and the Battle for Existence through the Long Arctic Night*. London: T. Fisher Unwin.